
右京VSコナン

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右京VSコナン

【Nコード】

N1685Z

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

これは作者ミスターが短編で書いている小説 右京VSコナンのリメイク版です 短編の連載はいたしませんので了承ください
第1話Cを書き直すため消去しました

第1話A

12月1日 21時45分 東京都米花町

米花町の某所で黒づくめの組織が取り引きをしていた

ウオツカ「例の物は？」

取引相手「これだ」

何かの資料を渡す

取引相手「お礼は？」

ウオツカ「お礼ならちゃんとありますで」

と黒バツクから現金を取り出すウオツカ

取引相手「取引成立だな」

ウオツカ「ああ」

女「きゃ」

若い女性の悲鳴が

そして長髪の男が出てきた

ジン「なんでハガネがここにいるんだ？」

ハガネ「上の命令よ」

そう彼女は答えた

ジン「あの方が…」

ジンはつぶやいた

ウオツカ「どうしますか？ 兄貴」

ジン「たとえあの方の命令でも

取引を見た物は殺す」

そう言つて薬みたいな物を出した

ハガネ「なにをするの！」

ジン「決まっているだろ 例の薬で

お前を殺す！」

そう言つて無理やり薬を飲ませるジン

ジン「ずらかるぞ」

ウオツカ「了解！」
ジン（あばよハガネ）
その場から消えたジンとウオツカと取引相手
ハガネ「体が熱い！」
そう言つて気を失つていった…

22時20分

ハガネは気づいた

ハガネ「生きてるて事は副作用が効いたのね」

そう彼女は幼児化したのだ

そして誰かに電話を入れる

電話「はい 小野田です ただいま留守にしております
後ほどおかけ直してください」

ハガネ「なんで留守電なの！」

小野田とはもちろん警察庁官房室長の

小野田警視監の事である

何故彼女が小野田にかけたと言つと

小野田の孫だからだ

八ガネ「杉下警部なら」
と急いで花の里へ向かう八ガネ

花の里では

たまき「お茶つけにします？」

右京「わさびは多めに」

たまき「わかってます」

薫が入って来た

たまき「いらっしやい」

薫「うっす」

その後小野田が来た

たまき「あらおめずらしい」

小野田「杉下と同じ物を」

たまき「わかりました」

右京「僕に何か用ですか？」

小野田「ああ 久々孫から電話があったんだ」

右京「どういう？」

小野田「出てないよ」

右京「はい？」

小野田「どうせ あれが欲しい これが欲しい

の催促電話だと思うから」

右京「何時頃電話があったんですか？」

小野田「22時23分」

右京「そんな時間に催促の電話を彼女が入れるとは思いませんか」

小野田「……」

右京「例えばこういうのは考えられませんか

何者かに追われてて命の危険にさらされてる」

小野田「なるほど」

その後まだ一人客が…

たまき「いらっしやい」

客はハガネだった

薫「子供のようですね」

右京「ええ」

小野田「君　もしかして優花か？」

ハガネ「……」

ハガネは沈黙する

薫「優花って官房長のお孫さんの……」

右京「ええ　確か高校生くらいだと官房長から聞いてます」

ハガネ「私は優花よ！」

と叫んだ

小野田「何でこんな姿になったか

話してくれるよね？」

優花「わかったわ全部話す」

つづく

第1話B

一通り説明が終わって

右京「それでしたか」

小野田「なんで今までだまってたんだ」

優花「だって 話すとみんなが犠牲になるから」

薫「その組織でそうとうヤバいのか？」

優花「ええ」

右京「まさか幼稚化する薬が存在する
とは驚きです」

優花「性格には副作用よ」

小野田「優花 これからどうする？」

優花「え？」

小野田「これからの生活だよ」

優花の父と母は組織に殺されてるため
現在1人暮らしをしている

薫「俺の家来るか？」

薫の意外な問いかけに対し

優花「私が行っても迷惑になるだけですから」

薫「迷惑なんで むしろ歓迎するよ」

優花「そう言ってくれると嬉しい」

薫「官房長 いいですか？」

小野田「優花がそれを望むなら」

薫「優花ちゃんもそれでいいか？」

優花「構わないわ」

そして花の里を後にする優花と薫

ここで説明 亀山の家は米花町にある

という設定で吉田歩美と同じマンションに住んでいる

亀山邸の前

薫「美和子には伝えてあるし パツパツとやるうぜ」

優花「何をですか？」

薫「歓迎会に決まってるじゃん！」

薫「今帰ったぞ！」

優花「お邪魔します」

薫「いい？ここはもう優花の家なんだから」

優花「ただいま」

薫「お帰り」

このようなセリフをエヴァの

葛城ミサトが言っていたような…

美和子「お帰り薫ちゃん」

薫「ああ」

美和子「その子ね」

優花を見て言う美和子

薫「まあな」

優花「はじめまして小野田優花です」

美和子「丁寧に 私は美和子よろしくね」

そして歓迎会も終わり学校の話に入る

美和子「転校の手続きは私がしとくから」

優花「ありがとうございます」

薫「この辺なら帝丹小学校になるかもな」

あぐびをする優花

美和子「眠いの？」

優花「うん」

薫「もうこんな時間か」

美和子「もう寝ましょ」

そして3人は睡眠に入った
つづく

第1話B（後書き）

説明文がすくなくごめんなさい

第1話C

12月5日 帝丹小学校

コナンのクラスで生徒達がざわざわしている

小林「はいみんなしずかに！」

コナン「？」

小林「今日は転校生を紹介します」

転校生（優花）が入って来た

優花「亀山優花です宜しくお願いします！」

生徒達が

生徒「か かわいい！」

警視庁でも

組織犯罪対策課を通る男

そして特命の部屋着く男

特命の部屋でコーヒーを飲む角田に挨拶する

男「本日付けで」

角田「おっと 俺はこの人間じゃないあつちだ」

組対の方に手を向ける角田

男「高木涉です」

角田「角田だ 机はそれを使えばいい」

高木「はい」

ここで説明 何故高木が特命係に

配属になったかというと実はある事件で

指名手配中の容疑者を取り逃がす

という重大なミスをしたのだ

普通なら懲戒処分だか彼はまだ新人

なため一定期間 特命係に島流しという形になった

高木「杉下警部と亀山さんは？」

角田「ご覧の通りだ」

高木「どこへ行ったんですか？」

角田「さあ知らん 今日来ていない
昨日もだ」

つづく

第1話C（後書き）

だいぶリメイクしました

第1話D

高木は都内のあるマンションに移動した

伊丹「特命係の高木！」

そう叫ぶのはご存知トリオザ捜一

リーダー伊丹刑事である

高木「伊丹さん」

三浦「特命係に島流しされた高木君が何のごようですかね」

高木「杉下警部と亀山さんは？」

芹沢「先輩と杉下警部 いないんですか？」

高木「ええ 昨日からいないみたいで」

そこへ佐藤刑事が入って来た

佐藤「あら高木君どおしたの？」

伊丹「警部殿を探してるみたいですよ」

佐藤「警部殿って杉下警部の事？」

高木「はい」

佐藤「それなら箱根にいるんじゃないかしら」

高木「箱根？」

佐藤「昨日 杉下さんに呼ばれて資料を届けに箱根行ったから」

芹沢「だから昨日午後 休暇を取った

んですね」

佐藤「余計な事は言わないの！」

つづく

第1話D（後書き）

今回は捜一を中心に書いてみました

第1話E

毛利探偵事務所

コナン「ただいま」

優花「お邪魔します」

関西弁の少年が声をかける

平次「久しぶりやな 工藤じゃなくて

コナン君」

蘭「またコナン君の事工藤って言ってる！」

平次が間違えるのはコナンが自分が

新一だと教えたからだ

和葉「その子は誰や コナン君」

優花を見て言う和葉

コナン「今日転校して来た亀山優花さんだよ」

優花「はじめまして 亀山優花です」

蘭「宜しく」

コナン「何で平次兄ちゃん達がここにいるの？」

平次「箱根に行くついでだからや」

小五郎「箱根だと？」

和葉「実はな一昨日平次のおかんが

福引きで箱根のホテルのチケットを

当てたんや」

蘭「へー」

平次「そろそろ行くで」

コナン「僕らも行こうよ」

平次「かまへんで」

蘭「そうねいこっか」

和葉「でも優花ちゃんは？」

優花「私は大丈夫よ 親が今仕事で

箱根にいるから」

小五郎「行ってこい 行ってこい

明日には帰ってこいよ」

蘭「分かっているわよ」

つづく

第1話E（後書き）

少年探偵団が一度も出ないとは…

第1話F

国道1号線付近

高木の車

高木「噂さには聞いていたか

まさか自分で事件を作るとは…」

一人言を言う高木

実はマンションを出る前その事を

鑑識の米沢守に聞いたのだ

数十分後箱根に到着

コナン達も箱根に到着

平次「やっとなつた」

和葉「空気がおいしい！」

コナンが誰かに気づく

コナン「あれ高木刑事じゃない？」

蘭「ほんとだ！」

和葉「挨拶しに行こや」

高木の元へ行くコナン達

コナン「高木刑事！」

高木「コナン君!？」

それに蘭ちゃんや平次君達も」

コナン「警視庁の刑事が箱根に

いるの？」

高木「そそれは…」

ほんと高木は言いたくないのだが

この話は次回にしよう

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1685z/>

右京VSコナン

2011年12月7日07時45分発行